

[他2] 経営管理者等に対する教育政策の理解の普及

2-1 教育改革FD/ICT理事長・学長等会議

<事業計画>

加盟校の理事長、学長、学部長等のガバナンス関係者を対象に、教育の質的転換を加速するための教育改革、教学マネジメント改革の認識を深めるとともに、ICT活用による教育の質保証について、課題認識の共有を目指す。また、サイバー攻撃から大学を防御するための経営執行部の対応についても認識を深める。

(1) 開催要項の策定

- ① 昨年度実施した理事長・学長等会議のアンケートにおいて、ICTにかかわるテーマを多くとりあげるようにとの意見を踏まえ、平成29年度のテーマは、『大学の教育力向上、教育の質保証に向けた改革の課題とICTの活用』とした。
- ② 開催の趣旨は、平成30年度の政府予算編成を検討する経済財政諮問会議において、『人材投資による生産性向上』を成長戦略の柱に据えることが確認される中で、教育の質向上、教育力向上等の大学改革が重要課題として取り上げられている。一方、文部科学省における『第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方』の中で、大学教育では、知識・技能の習得、学びを人生や社会に活かそうとする主体的な人間性の涵養、未知の状況に対応できる思考力・判断力・表現力等の育成、いわゆる「学力の3要素」を基盤にこれからの時代を新たに創造していく力を持つことが重要であるとしている。このような背景の下で、教育の質的転換としての改革の実効性を振り返り、問題を整理するとともに、ICTを効果的に活用している事例及び提案を通じて、改革方策を探求することを計画した。
- ③ プログラムは、二つの講演を行った後、話題提供を受けて全体討議を計画した。

[講演1]は、『学力の3要素を深化・発展させる大学教育改革とICT活用』と題して、多極化・グローバル化社会への転換、産業構造等の転換など先行きが不透明な時代に若者の資質・能力が国の命運を担っており、その実現に向けて教学改革、教職員の意識改革、ICT活用の全学的普及などの課題について現状と展望を説明いただくことにした。

[講演2]は、教育の質保証とICTの利活用をテーマに、『大学価値の向上を目指したIRの試み～学生のリフレクションを促し、成長に結びつける』と題して、教員と学生双方が達成度を評価し、ICTによる総合評価提示システムでIRによる分析を可視化する事例を紹介することにした。

[全体討議]は、『大学の教育力向上、教育の質保証に向けた改革の課題とICTの活用』を討議するため、最初にICT利活用の状況と課題について、以下の通り三つの話題提供を考えた。

一つは、ICTを活用して内部質保証と外部質保証をセットにして、学修成果の可視化に取り組む『全学的横断基盤力テストによる卒業時の質保証とステークホルダーによる外部評価の試み』の事例紹介とした。

二つは、委員会で検討を進めているネットを最大限活用して分野を横断して知識を組み合わせ、批判的思考力、合理的思考力を身につける『知識の創造を目指したICT活用による多分野連携フォーラム型授業』の提案とした。

三つは、『大人数授業での反転授業による知識の定着・活用の効果と課題』の事例紹介とした。

平成29年度教育改革FD/ICT理事長・学長等会議開催要項

日時：平成29年8月2日

場所：青山学院大学青山キャンパス

【テーマ】大学の教育力向上、教育の質保証に向けた改革とICTの活用

【開催趣旨】

来年度の政府予算編成の「骨太の方針2017」を検討する政府の経済財政諮問会議において、日本は他の先進国に比べて生産年齢人口の減少、労働生産性の低下、人的資本への投資の脆弱が指摘される中で、「人材投資による生産性向上」を成長戦略の柱に据えることが確認され、教育の質の向上、教育力向上等の大学改革が重要課題として大きくとりあげられている。

他方、文部科学省では、平成30年度から開始する「第3期教育振興基本計画の策定に向けた基本的な考え方」の中で、「自立した人間として、主体的に判断し、多様な人々と協働しながら新たな価値を創造する人材の育成」、「全ての人々が持つ可能性を开花させることで、一人一人が活躍し、豊かで安心して暮らせる社会の実現」、「個人の資質・能力を最大限伸ばし、生産性の向上により経済成長を図るなど、社会（地域・国・世界）の持続的な成長・発展」を目指すとしている。とりわけ、大学教育については、学力の三要素を基盤にこれからの時代を新たに創造していく力を持つことができるよう、高大接続改革の着実な遂行が求められるとし、三つの方針に基づく教学マネジメントのPDCAサイクルの強化を通じて、大学教育の質の向上、学生の問題発見・解決能力の育成が重要であり、ICTの利活用を積極的に推進する必要があるとしている。

各大学は、教育力の向上、教育の質保証を目指して改革に取り組んできているが、その効果については一部の大学にとどまっている傾向が見られる。今後は、大学が掲げた三つの方針の実質化に向けて、カリキュラムの体系化、シラバスの可視化と相互点検、知識の定着・活用・創造の視点からの授業改善、学修時間の増加・確保、学修ポートフォリオによる学修行動の把握と分析、学修成果の評価と可視化など、理事会、教学執行部、教職員が一体となった改善・改革の推進が急がれている。

そこで、本会議では、これまで教育の質的転換として教育活動を展開してきた改革の実効性を振り返り問題を整理するとともに、ICTを効果的に活用している事例及び提案を通じて、改革方策を探求することにした。

【プログラム】

13:00 会長挨拶 向殿 政男氏（明治大学顧問）
会場校挨拶 三木 義一氏（青山学院大学学長）

13:10 [講演1]

「学力の三要素を深化・発展させる大学教育改革とICT活用」

講師：安西 祐一郎氏（日本学術振興会理事長、文部科学省高大接続改革チームリーダー、本協会副会長）

多極化・グローバル化社会への転換、産業構造等の転換など先行きが不透明な時代が来ている。その中で特に、若者の資質・能力が国の命運を担っている。十分な知識、技能、それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力、これらの基になる主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度の全てを身に付けられるようにすることが重要であり、その実現に向けて、教学改革、教員職員の意識改革、ICT活用の全学的な普及が大学の責務として喫緊の課題となっている。本講演では、これらの課題について現状と展望を述べる。

14:15 [講演2]

「大学価値の向上を目指したIRの試み～学生のリフレクションを促し、成長に結びつける」

講師：水野 豊氏（京都光華女子大学特命教授、EM・IR部長）

大学としてのブランド力を高めるため、入学前から卒業後までの学生支援を総合的に行う中で、学生が主体的に到達状況を振り返り、自己の成長に結びつけられるよう、学生支援情報システムとして、学生カルテ情報、成績情報、学修行動などの自己評価や学科ポートフォリオなどのデータを組み合わせ可視化し、学生満足度の要因と構造分析やディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの一体性確保の点検などにIR活動を展開している。

14:55 休憩

15:10 [全体討議]

「大学の教育力向上、教育の質保証に向けた改革の課題とICT活用」

【話題提供】

※ 「全学横断基盤力テストによる卒業時質保証とステークホルダーによる外部評価の試み」

千代 勝実氏（山形大学学術研究院教授）

※ 「知識の創造を目指したICT活用による多分野連携フォーラム型授業の提案」

片岡 竜太氏（昭和大学歯学部教授）

※ 「大人数授業での反転授業と協働的授業モデルの取り組み」

渡辺 博芳氏（帝京大学理工学部教授）

【質疑・意見交換】

17:10 関連情報提供

「平成28年度私立大学教員授業の改善白書」

「学修ポートフォリオシステムの導入・活用の参考指針」

「平成28年度教育への情報化投資額の実態」

「情報セキュリティ・ベンチマークテスト」など

18:00 懇親会

本協会挨拶

会場校挨拶 山本 与志春氏（青山学院常務理事）

19:00 閉会

(2) 実施結果

加盟校60大学、6短期大学から、114名が参加した。以下に、会議を通じて認識又は理解が進んだ主な点及びアンケート結果を報告する。

[認識又は理解が進んだ主な点]

- ① 多極化、グローバル化、情報化、若年者の減少などの変化は、社会の大転換をもたらしている。言われたことを鵜呑みにして覚え、選択肢から答えを探す教育はこれからは通用しない。求められるのは、知識・技能をもち、答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力と主体性をもって多様な人々と協働して学び働く力で、学生が卒業後に幸せな人生を歩んでいけるよう高大接続改革と大学と社会が接続する大社接続による教育改革が必要。
ICT活用で重要なことは、具体的にどのような能力が身につくのか、例えば推論や合理性などの思考力を明確にすることが重要。人工知能の出現により、学生の学修状況を把握し、最良の教育を提供できるようになるが、それには学修でどのような点でつまづいているのかなどのデータを常に蓄積しておくことが肝要である。
- ② IRは、入学から卒業まで学生の成長支援を中心にエンロール・マネジメントに活用している。ビッグデータベースの構築は困難なため、既存情報をリスト化して全学に公開し、入学から卒業までの追跡情報を関連づけたデータを構築して可視化し、早期退学者の防止対策、授業外学修時間と学修行動分析による授業デザインの改善、授業の内容・方法・評価の改善に活用している。組織的に推進する仕組みは、IR活動の計画とIR分析結果を踏まえた評価の協議を大学全体で行うことにより、教育改善のPDCAサイクルを形成することが効果をあげている。
- ③ 大学教育の質保証の課題は、科目に依存しないで測定する直接評価が有効であるこ

とから、専門を学ぶ力、人間力や社会人基礎力、語学力や国際理解力を基盤力として、スマートフォンを介して1年入学当初、1年終了時、3年次に基盤力テストを行い、達成度の伸びを評価して学生にフィードバックしている。また、地域目線で教育評価・教育改善を行うために企業、自治体などによる外部評価の枠組みを作り、卒業生に期待する資質・能力の意見交換、学生との懇談、授業参観による評価・意見助言などの外部評価改善活動が必要である。

- ④ 与えられた情報・知識を鵜呑みにするのではなく、多面的に推論過程を吟味する論理的・合理的思考を訓練する仕組みとして、社会課題をテーマにネット上で多分野による学生がチームでPBLを行うことにより、関連分野の知識を組み合わせることで問題解決を考察する分野横断型授業の必要性が提案された。
- ⑤ 知識の獲得と汎用的能力の向上を図る方法として、教員が協働して学科のコア科目群を複数の教員で設計し担当するチームティーチングを通じて、知識獲得を行う反転授業の設計、課題解決を目指す授業設計を共同で担当することにより組織の教育力が向上したことから、大学教育の改善に教員の協働が不可欠である。

[アンケートの結果（回答率22%）]

- ① アンケートの多くが、大学教育の在り方を考えることができた。ICT活用の話題提供も具体的で優れた取り組みで大変参考になったとの感想が寄せられた。
- ② 今後希望するテーマとしては、教育改革に向けた教員の意識改革、アクティブ・ラーニングの優れた取り組み事例やアクティブ・ラーニングを担当する教員の教育力向上対策、グローバル人材育成のためのICT活用、eポートフォリオの活用などであった。

なお、実施結果の詳細は、巻末の平成29年度事業報告の附属明細書【2-15】を参照されたい。